

パネルディスカッション

テーマ 城下町甲府のまちづくり

コーディネーター	帝京大学文化財研究所 所長	萩原三雄
パネリスト	広島大学大学院文学研究科 教授 甲府商工会議所地域活性化委員会 委員長 公益財団法人山梨総合研究所 副理事長	三浦 正幸 丹沢 良治 早川 源



1 まちづくりの考え方

萩原氏（コーディネーター：以下同様）

ご紹介いただきました萩原です。これからシンポジウムのコーディネーターを務めさせていただきます。短時間ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

今日は広島から三浦先生にお越しただいて、天守の大きさ・構造について非常にリアルで説得力のあるお話をいただき、私たちにとっては大変衝撃的でした。それから今、宮島市長から「新しい市庁舎の建設とまちづくり」というお話もいただきました。これらを踏まえて、今から「城下町甲府のまちづくり」というテーマで少し話し合いをしてみたいと思います。もちろん会場からも、ご発言があれば積極的にお願い

したいと思います。

ディスカッションのポイントは、一つは甲府城の天守を含めた整備・復元の問題です。もう一つは、甲府城を含めた甲府城下町についてです。甲府のまちは、甲府駅から上へ、武田氏の館があった武田神社あたりまではずっと、戦国時代に形成された城下町であり、甲府駅から南側の太田町公園あたりまでは、近世江戸時代に形成された比較的新しい城下町でした。すなわち、甲府のまちというのはまさに中世・近世の城下町がうまく並行して存在しているという、日本でもまれな構造をしており、そこに400年以上の歴史の重み、風格が備わっているということでもあります。しかし、先ほど市長のお話にもあったように、現在は少し活力が低下しているということです。こうした点を踏まえ、これからのまちづくりはどうあるべきか、という議論もしてみたいと思います。

まず、パネリストの丹沢さんと早川さんに、それぞれご意見をいただいて、それから話し合いを進めていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

丹沢氏（パネリスト：以下同様）

甲府商工会議所の地域活性化委員会の委員長を務めております丹沢です。よろしくお願いいたします。

私は、甲府市内城下の桶屋町というところで生まれました。桶屋町というのはちょうど三の堀、今の濁川の中側です。私が小さい時には桶屋さんが1軒ありました。隣の鍛冶町には鍛冶屋さんが1軒ありました。川向こうが若松町で芸者さんがいました。私は町なかの小学校に行ったものですから、今の銀座通り、仲見世通り、中心街などによく遊びに行きました。非常に賑やかで本当に楽しく幸せな時を過ごさせていただきましたが、今の甲府の中心街を見ていますと寂しくつらい気持ちになります。私は柵タンザワで全国の観光地に店舗展開をしていますが、何とか甲府のまちも人がたくさん来るようなまちにできないものか、と日頃から思っています。

甲府盆地の商圈人口は、ひと頃は40～50万人と言われました。昔は甲府の街なかにも買い物客が来ていましたが、郊外にショッピングセンターができて、客は外へ流れていき、中心部のお店もだんだん少なくなりました。

東京大学大学院経済学研究科の伊藤元重先生は、「中央都市で商圈人口が300万人以下のところでは、中小零細企業は残らない」と言っています。確かに、大手のショッピングセンターが進出してきましたし、路面店の飲食店、物販店、専門店も、大企業に押されて、小さな地元の商店はどんどんなくなっていく時代です。何とかしていかなければならないとは思いますが、商圈人口40～50万人ではどうにもならない。では、商圈人口を300万人にするにはどうすれば良いか。どうしても、近くにある3,000万人の首都圏からの交流人口を増やしていかなければならない。

人が集まる場所というのは、その地域の歴史的な景観があるものです。私どもは、

北海道から九州まで出店しています。商圏人口が300万人以上あるところでないとは出店しないのですが、多くの観光客が来る場所というのは、その地域の歴史的景観を残すなり再生するなりしてまちづくりをしているところです。そう考えると、甲府のまちも、三浦先生のお話にあったようなお城をきちんと整備して、できることなら天守閣も造り、甲府の昔の歴史的景観を再生しなければ生き残れず、壊滅状態になるというような危機感を持っています。「甲府城を再生する」ということが第一に必要なかと思っています。

甲府市が実施した甲府駅北口の新拠点整備事業で、NHKや合同庁舎、県立図書館が整備されたりして非常に良くなってきていますが、行政の庁舎中心なのでどうしても味気ないところがあります。私どもは小さな会社ですが、お城の北側整備に手を挙げたところ、甲府市から「歴史的なものをつくるのであればやってくれ」という話がありました。そこで、歴史的な空間を北口につくり出し、これを成功させることで、甲府駅南口周辺整備計画を進める際の参考にもなればと思っています。甲府駅前や甲府城のフロントである甲府税務署跡地、お城の東側のエリア全体を、小江戸文化の香りのするような、それでいて現代のおしゃれ感覚も相まった、良いまちにつくっていけないのではないか、と感じています。そういうまちづくりができたらいいいと思い、社長職を辞め、現在このまちづくりが私の仕事になっているところです。また、これを機会に皆さんにも応援をしていただければありがたいと思います。

萩原氏

ありがとうございます。それでは早川さん、お願いいたします。

早川氏（パネリスト：以下同様）

みなさん、こんにちは。山梨総合研究所の早川です。今日は広島から遠路甲府まで来ていただいた三浦先生から大変素晴らしい、刺激的な話をいただきました。本当にありがとうございました。今、すでに『甲州夢小路』において具体的な事業を展開されている丹沢さんからまちづくりについてのお話がありました。

甲府でまちづくりの機運がこんなに高まったことは、私の意識の中では初めてのことです。甲府のまちづくりはこれがラストチャンス、ここでまちづくりがきちっとできなければ、未来永劫できないだろう、次の世代にいいまちを残すなんてことはとても叶わないのではないかと、という思いがあります。そういう意味で、甲府のまちは大きな岐路にあると感じています。県民・市民がここでどう判断するか。市民の民度が問われていると思っています。

私は愛宕町に住んでいます。朝、愛宕山のふもとを30分くらい散歩しています。甲府のまちを愛宕山から見ていて、今の開発が一段落したら果たして甲府のまちはどうなるのか、いつもこのことが頭から離れません。確かに起重機がアルプスの嶺を超え

るくらいの高さで立ち上がっており、活気があると見えるわけですが、この開発が一段落したら果たしてどうだろうか。まちは確かに近代的な装いをしてくれいになるだろうと思いますが、果たして賑わいが取り戻せるか、本当に活性化するのか、そのためには何をしたらいいのかということを考えますと、まさに正念場を迎えているということではないかと思えます。

先日、ある資料を読んでいたときに、シビック・プライドという言葉が出てきました。これは18世紀にイギリスで生まれた考え方で、市民がまちに抱く愛着や誇りを生み出すようなまちづくり運動を総称した概念のようです。そんな資料を読んでいたときに、確かNHKのテレビ番組だったと思いますが、水戸芸術館で小澤征爾さんが髪を振り乱して指揮棒を振っているというオーケストラの情景を見ました。水戸市は東京から100kmという、ちょうど甲府と同じ位置にあってよく似たまちですが、この水戸で小澤征爾さんがなぜ病気をおしてまで棒を振るのかということ。それがなぜ水戸芸術館なのか。もう一つは、あの映像を見て水戸市民はどう感じたか、ということも思いました。

水戸芸術館は今から22年前に建設されました。その時の市長の佐川一信さんが、建物を建てる予算のほか、水戸芸術館の芸術活動に今後毎年市の予算の1%をあてるということを発表しました。当時の予算規模でみますと年間9億円くらいです。建物には予算をつけても、芸術活動の運営費に市の予算の1%をずっとあて続けるということは、どこの市町村でもかつてないことでした。そうしたところ、吉田秀和（音楽評論家）さんがその話を聞いて「私が応援をする」と言ったわけです。すると吉田秀和さんの信奉者や弟子がみんな賛同しました。その一人が小澤征爾さんであり、ピアニストの中村絃子さんでありという面々でした。そのまま22年が経過し現在に至っています。このことが、小澤征爾さんが水戸で指揮棒を振る大きな理由であったろうと思います。今、水戸では水戸芸術館を中心にボランティアが1,000人以上登録されているそうです。芸術館の運営には70~80人いれば間に合いますが、登録者であることが市民の誇りになっているわけです。

今日の三浦先生の講演を聞いて、我々は知らないということは恐ろしいことだと思いました。やはり知ることによって甲府城への愛着や自分たちのまちの誇りが生まれるとつくづく思いました。

もし甲府城がなければ、のっぺらぼうの、しまりのない甲府のまちしか浮かんできません。どうみても甲府のまちの顔は甲府城であることは間違いない。「武田の城ではない」という屈折した意見もあるかもしれませんが、甲府のまちのランドマークを考えるならば甲府城しかない。今、県防災新館、甲府市新庁舎といったハードが次々と建ちあがってきますが、甲府城をランドマークに歴史、文化などまちの匂いをどう埋め込んでいくか…これからです。どんなに素朴なものであってもいい、どんなに小規模なものであってもいい、他と比べることができないような、地域の持っている資源、

独自性、そういう主張をするようなもの、総称すると「文化的最大」というようなものを、われわれは用意していかなければいけない。「文化的最大」をつくるまちづくりに、舵を切る時ではないかと思っています。

つい先日、境町でしょうか、「太宰の散歩道」という看板が出ていました。「そうだ、太宰治はこの辺を歩いたんだ」と、いろいろな想像が浮かんできました。ちょうど甲州夢小路の東側を出たところ、踏切の近くでした。標識一つでも、どことも比較できない、ここにしかないというものが甲府のまちにはいっぱいあるわけです。

今、県立博物館で「黄金の国々」という展示をしています。是非ご覧になっていたきたい。地方であれだけの資料を展示しているのはかつてないというほどのもので、私はすでに2度行きました。

先日、中央2丁目では金座の跡が発掘されました。これをとっても他と比較することのできない、甲府のこの場所しかないという「文化的最大」の資源であると思います。

そういう目でよく考えてみると、旧町名を復活するとか、少なくとも表示をするとか、〇〇通りというような名称や、富士川舟運の終焉はどの辺だったのだろうか。食べ物などの特産品の面でみると、煮貝もあれば鳥もつもあれば宝飾もあるといったように、他と比較できない素晴らしいものが資源としてたくさんあります。山梨中央銀行の金融資料館があります。印傳博物館もあります。度量衡制度も山梨から発祥しているわけで、おそらく資料もたくさん保存されていると思います。このように考えると、「文化的最大」を表現する材料はいっぱいあるのです。これらをもう一回見直していくことが大切であると思います。

丹沢さんが、行政に頼らず自力で始めた『甲州夢小路』の整備と、いろいろなイベントも仕掛けられているわけですが、このような動きを起爆剤にして、何とかここでまちづくりを、行政によるお仕着せではなく、市民・県民が一体となって進めるという方向に舵を切っていただきたいと思っています。

2 甲府城の特色

萩原氏

ありがとうございました。早川さんからは、歴史や文化を基調としたまちづくりが重要というお話をいただきました。甲府というのは「甲斐の府中」が短くなった名前ですが、ちょうど甲府城の上が戦国の城下町、下が近世の城下町にあたり、甲府城というのは上の都市と下の都市をつなぐちょうど真ん中の位置にあります。江戸時代も現代も、甲府城が、場所的にも文化的にも核になるだろうと思います。

我々は、まず自分のまちの歴史を知ることが前提として、そこから個性あるまちづ

くりをしていくことが必要、とのお話がありました。先ほどの三浦先生の講演以前には、甲府城の天守の規模はあまり知られていませんでした。以前、132cmの鯨が出土した際、これは松本城に匹敵するということで新聞にも大きく出ましたが、今日の講演を聞きますと、松本城の鯨は比べものにならないくらい小さいですね。天守の規模、意匠その他について、最先端の研究者である三浦先生から95%間違いないとのご発言がありました。改めてお聞きいたしますと、甲府城の天守閣については非常に特色豊かと言って差し支えないのでしょうか。

三浦氏（パネリスト：以下同様）

甲府城というのは甲府市民が思っているより遥かに立派です。甲府は、武田信玄・武田家のまちであったということが非常に有名なものですから、逆に、甲府城が武田のものではなくて、それから後のものだということから、甲府の皆さま方の甲府城に対する愛着がいまひとつ足りないのと、いまひとつ自信を持てなかったというようなことがあって、宝の持ち腐れで価値を知らなかっただけではないか、という気がします。もう少し甲府城自体の価値を知ることが大事です。

甲府城がなぜそのように立派だったのかと考えると、豊臣政権が徳川の勢力に直面した際、徳川家康を江戸に封じ込め、江戸以外のところを豊臣の配下にしっかりと置くために、甲府を重要視したのだとわかります。その重要度は、東海地方よりはるかに勝っていたことがうかがえます。例えば、現在の静岡県下に配置された武将たちは大した禄高をもらっていません。徳川家康が東海道を通過して出てこれられないよう、山内一豊、堀尾吉晴、中村一氏といった武将を東海道のずらっと並べて配置しましたが、彼らは豊臣政権下では中小大名級です。そうした中、秀吉の重臣でありひととき禄高の多い浅野氏を甲府に置いたということで、甲府城の戦略的・軍略的価値の高さがうかがえます。さらに、甲斐国の国柄も、日本を治める上で重要でした。このため、造られた城は当時としては一回り大きく、城の石垣も全国屈指の古いものであるし、天守閣も相当の大きさだったのです。その後、江戸時代に入ってから、徳川幕府は甲府城を直轄城として非常に重要視していくことになります。

「甲府城は武田氏と関係ない」とがっかりするのではなくて、武田氏という歴史的シンボルの価値に加えて、もう一つ、近世になってから造られた重要拠点としての甲府城の歴史的価値を再評価してほしいと思います。日本全国、城のあった県庁所在地はたくさんありますが、甲府城はその中でもトップクラスにあったと思います。したがって、現代においてももう少し城下町が立派に繁栄してほしい、というのが私の考えであります。

3 景観の復元・再現

萩原氏

ありがとうございました。武田神社は大正8年の創建です。かつて武田氏の館があった場所に武田神社ができたわけです。神社には武田氏関連の史料が多く残されており、今整理をしています。2019年には、武田信虎が甲斐の府中を甲府の地に移してから500年を迎えますので、甲府市では「開府500年」に向けて着々と整備を進めているわけですが、それに比べると甲府城はまだ知名度、歴史性が知られていないということです。石垣の歴史的価値についてはわれわれもいろいろところで話をします。城の東側の店舗が移転したことでとても美しく高い石垣が表れ、非常に驚きでした。見事な石垣がたくさん残っていると思いました。しかも、豊臣政権下の時代の古い石垣が残っているということで、歴史的価値も高いということが理解できます。

このように、歴史に富んでいる甲府ですが、丹沢さんは、風格や歴史的景観を大事にしたまちづくりを目指しているということです。解体が予定されている県民会館や、移転済みの税務署跡地の周辺、お城南側（フロンティア）の景観の復元・再現については、どのようにしていったらよいとお考えでしょうか。

丹沢氏

現在の県民会館の場所にはもともと堀がありました。甲府というのは、どちらかというと甲府城を壊しながらのまちづくりをしてきました。県民会館の建設に際しても、甲府城の堀を壊してきました。経済成長の時にはそのようなことも大事だったと思います。しかし今、世の中では、新たにものを作る時代から昔に戻そうという方向へと流れが逆転しているように感じます。人口減少・少子高齢化が進む中、今、山梨県は空き家率が日本一だという話も聞いています。そうした時代には、できるだけ歴史的なものは残し、むしろ元に戻すようなまちづくりを、ぜひ考えていただきたいと思います。お城南側のフロントには、何か新しいものを造るということではなくて、昔の堀の姿にできるだけ戻すというような配慮をしていただくことが、甲府のまちにとっては望ましいと思います。

水辺のあるまちというのは潤いがあります。かつて東側にも堀があったし、平和通りのところも、防災新館を建設しているところも堀だったわけです。ですから、できるかぎり堀は残していただきたいと思っています。

甲府には門が3つあったと聞いています。「山手門」は甲府市が整備しました。県庁の駐車場入り口の付近には「追手門」があったそうです。また、スクランブル交差点のところには、「高麗門」というのがあったということで、高麗門があって追手門に入るというような門を造れるようならお願いしたい。もうひとつ、平和通りの宝くじ売

り場の少し上の、かつて柳屋という旅館があった付近に「柳門」がありました。柳門、追手門、山手門の3つが揃うと、甲府城の中に入れるということで、このようなものもできるだけ再生していただきたいと思っています。

甲府城を大事にしたまちづくりをしていかないと、甲府は21世紀の中で沈んでいってしまいます。お堀や門など、お城の整備がきちっとできれば、県外からも多くの客が甲府を訪ねてくるだろうし、県内の方も甲府に集まるだろうと思います。富士山めあての海外の方たちも「甲府のお城を見て行こう」となります。三浦先生の講演は、天守閣が復元できたら甲府は一変する、という夢を感じさせるものでしたし、そのような方向に進んでいければ、甲府は本当に良いまちになると思います。ぜひここで、甲府のまちづくりをしっかりと行って、国内外から大勢の人が甲府を訪れるような、甲府のまちに来るといろいろな国の言葉が聞こえるというようなまちになってもらいたいと思います。

4 シビック・プライド

萩原氏

住んでいる私たちがまちに愛着を持ち、自らのまちを知ることが大切だと思います。早川さんは「シビック・プライド」、まちづくり運動について言及されました。私は、山梨県内や他県の整備委員会で様々な遺跡の整備をしていますが、客観的にみて甲府は比較的まちづくり運動が盛んだと感じます。特に学生が熱心に取り組んでいるようです。早川さん、その辺についてはいかがでしょう。

早川氏

冒頭に申し上げましたとおり、機運は盛り上がってきていると思います。ですから、ここでまちづくりの舵をきちっと取って、行政と民間が一緒になって動き出せるかどうかということが問われていると思います。

今、丹沢さんが水辺とか歴史を戻すという話をされましたが、「風格のあるまち」や「歩きたくなるまち」というのは、やはり水と緑が豊かなまちです。出張で出かけた時に歩きたくなるまちがありますが、今の甲府のまちは「歩きたくないまち」です。これを何とかしなくてはなりません。

韓国での例を申し上げますと、ソウル市内にはかつて清溪川（チョンゲチョン）という大きな川がありました。最初は、川にこうぶたを架けて、上に高速道路をのせて暗渠にしてしまった。李明博（イ・ミョンバク）がソウル市長だった時に、その川をもう一度取り戻そうということで、こうぶたを全部外し、高速道路も撤去して清溪川を復活させた。ソウルに行った時、驚いたことに夜中の11時、12時でも川沿いにたくさんの方がいました。まちに水辺を用意するというのは非常に重要だと思います。

もう一つの例を挙げますと、今年の夏、中国の成都市に行ってきました。成都市には、諸葛孔明を祀る武侯祠（ぶこうし）という神社みたいなものがあります。20数年前に行ったときには、こんもりとした森の中にひっそり祠があったという記憶がありますが、今回訪ねると、武侯祠の周りには、仲見世の通りのように店が軒を連ねていました。観光客がたくさん来て、肩がぶつかり合うくらい人が歩いていました。

その光景を見て「パンとサーカス」という言葉を思い起こしました。ローマ時代の詩人が作った言葉だと思いますが、パンだけを用意したのでは駄目で、やはりサーカス＝遊びが必要だということです。お城も天守閣も確かに必要なのですが、これに加えて皆さんが楽しめる場が必要ではないかと思います。

成都の空港から旧市街地へ行く途中にグローバルセンターという大きなメッセ会場がつくられています。20万㎡くらいの大ドームが、鳥の羽を広げたようなデザインの総ガラス張りで、中国的ではない感じがしました。グローバルセンターの周辺には、飲食店やホテルのほか、シアターなどがたくさんありました。山梨のアイメッセにも大きな展示施設はあるけれど、人々が楽しむ場所は何もない。宿泊施設も飲食店も、その他の店も何もない現状では、人を集めることはできないということです。

甲府城をさらに整備して天守閣を造ることと併せて、丹沢さんが展開しているような「まち」をつくっていくということも非常に重要です。単なる機能だけではなくて、やはり「サーカス」、楽しみも併せてつくっていくというのが、外から大勢の人を呼び込む上では非常に重要なことだと思っています。

5 城下町のまちづくりの例

萩原氏

丹沢さんは日ごろ「歩きたくなるまちづくり」が大事と指摘されています。こうぶたを全部外すだとか、コンクリートを外して水辺をつくるというのは、長野県の小布施ですげいぶん行われていると承知しています。

三浦先生は全国のお城の整備委員や復元・設計に携わってきたわけですが、全国で成功していると思われるまちをいくつか紹介していただけるとありがたいのですが。

三浦氏

東京を中心としたところと、京都・大阪を中心としたところの2点に人口集中が続いており、地方都市はどんどん寂れていっています。したがって、どこも「まちづくり」を何とかしようとして立ち上がっています。

例えば、長崎市では観光に立脚したまちづくりを進めています。長崎市は観光資源が大変豊富で、はるか昔に潰してしまった出島を今は復元しています。様々な取り組

みにより観光客を誘致して、今や大盛況です。「元に戻す」取り組みは、各地で行われています。

また、私が今いる広島県には尾道というところがあります。国宝や重要文化財がひしめいているところですが、尾道では、そうした文化財を活用して歴史的な魅力のあるまちづくりを進めようということで、国の補助事業に採択され、これから大々的に整備していこうとしています。ただし、観光客のためというよりも、住んでいる人々が自分のまちに誇りを持つということに重点をおいています。全国的に、歴史的な資産を持っているまちでは国の補助制度を活用したまちづくりの機運が高まっており、順番に採択されています。山梨県でどこか申請・採択されているのかわかりませんが、それも一つの方法と思います。

皆さんは、甲府城の価値をあまりわかっていなかったことと同様に、山梨県内の歴史文化的資産がどのくらいあるのかということ、あまりわかっておられないのではないかと思います。歴史文化遺産の所在する数というものを都道府県単位で見ると、一番たくさんある場所は、不動産では京都と奈良が突出しています。また京都・奈良に近くてその影響を受けた大阪・滋賀・兵庫にも非常に多いです。これは関西の中心部ですので多いのが当然です。その関西の中心部を除くとどこが筆頭か分かりますか。西は広島県です。尾道と厳島を抱えており、広島県単独で中国・四国・九州の全県と対等な数の文化遺産を持っています。対して東ではどこかという、皆さん驚くかもしれませんが山梨県です。

山梨県は関東地方に属しているようですが、関東というところは、中世まで、つまり武田信玄が活躍した時代まではただの田舎で、文化は存在しませんでした。したがって中世の建築文化などは全然ありませんでした。その中で、山梨県ははるか中世から栄えていました。甲府を中心として近隣の甲州市や山梨市、かつて塩山と言われていた地域にある国宝・重要文化財の数は、栃木県の日光東照宮という特殊なものを除くと、山梨県単独で関東8県と対抗できます。それくらいの歴史的遺産を持っています。こういう事実は県民に知られていないのではないのでしょうか。

歴史文化遺産というのは、今後のまちづくりにきわめて重要です。甲府だけ栄えて周りが滅びるというのではなく、近隣の市町村と連携して山梨県全体をグレードアップするというのが非常に大事だと思います。山梨県の歴史的・文化的価値をさらに検証したうえで、関東8県の住民は山梨県へ文化を味わいにおいで、とアピールする。山梨県民・甲府市民は、自分の地域が文化の中心地だということで、さらに豊かで大きな心を持ってまちづくりを進めていただけるとよろしいと思います。

山梨県というのは、いろんな方向でこれからの発展の余地があると思います。知られざる遺産、忘れられた遺産の発掘の可能性が豊かであるし、甲府城もそのうちの一つだと思っています。

6 甲府城下町のまちづくり

萩原氏

山梨の歴史的建造物は日本でも有数だということですが、仏教彫刻も仏像も良いものがたくさんあります。京都・奈良から直接仏師が来てつくっています。建築物も同様です。県立博物館建設の際、いろいろデータを調べましたところ、山梨県の重要文化財の数は全国上位の位置にあり、そのようなところに私どもは住んでいるわけです。

お話に出ました、歴史文化構想の国の補助事業には、山梨県内でも採択を受けています。韮崎市の武田の里に願成寺と武田八幡宮という重要文化財があります。歴史的に豊かなところですので、韮崎市が4年くらいかけて構想をつくり、実現に向けてまちづくりを進めようということになっています。

お話を聞いて、山梨県というのは貴重な歴史文化的資源に満ちあふれている場所なのだという印象を改めて強く受けました。最後に、パネラーの方々から将来のまちづくりの抱負を含めてまとめのお話をいただきたいと思います。

早川氏

このようなシンポジウムが一過性のイベントで終わってしまうのではなく、ぜひこれを、まちに愛着や誇りを持つところまで行く市民運動につなげていくことが必要だと思います。先ほど「シビック・プライド」という言葉を申し上げました。例えば甲府商工会議所が数年前に、キャッスル・ファンドという形で、皆で資金を集めて天守閣をつくらうという考え方を出示してくれましたが、改めてこのようなことを考えて動き出す時ではないかと思っています。考えているだけ、知っているだけでは、もうまじいと強く思います。ぜひみんなでまちづくりをスタートさせたいと思っています。

丹沢氏

私は昨年、富山に行きました。富山新報を読んでいたら、中部地方で自分の県を一番愛しているのは富山県、とありました。富山の新聞だからということもありますが、客観的にそうだという記事でした。最下位が山梨県で、山梨県民は県土に愛着を持っていないという記事が出ていて、がっかりしました。そんな状況ですので、山梨を愛する気持ちを皆さんが持っていただけるようにしたい。三浦先生の話にもあったように、重要文化財がたくさんある県ということですし、かつては全国に誇れる大変立派な天守もありました。もっと誇りと愛着を持って、まちづくりを進めていければと思います。

萩原氏

このシンポジウムは、「城下町甲府」と銘打っています。甲府が城下町であるという認識をしている人は少ない感じがしていますが、城下町の再現、歴史や文化、風格を元に戻していくというお話も出されました。三浦先生には、県外から来訪された立場から見て、甲府のまちや山梨県全体、山梨県民などへの激励、こうあるべきだというご提言をお願いします。

三浦氏

他所と比べますと、甲府城はよく残っている方です。特に西日本では城に愛着を持たない人がたくさんいたので、本丸の真ん中に駅をつくってしまった広島県の三原をはじめ、城は片っ端から壊されていきました。城に対して全く愛着を持たなかったところの城郭は、かつての城下町といえども、地上から完全消滅しています。そういうところに比べると、皆さま方は結構壊されてしまったように見えますが、甲府城はよく残っています。中心部の石垣はほぼ完璧に残っていますし、駅の反対側にも遺跡が残っています。城の外郭の大部分は市街地に入ってしまったましたが、全国的に見ると比較的良い状態で保存されている方です。なぜ残っているか。いろんな偶然もあるのですが、きっと郷土に愛着を持っている人が多かったのだらうと思います。山梨県民もしくは甲府市民が地元に対して愛着を持っていないと評価するよりも、どちらかという、郷土の歴史・文化、そこに住んでいる人々の生活の風習まで含めた郷土というものを、自慢できるべきものととらえ、愛着を持ってきたと見る方がよいと思います。

私は外から見て、山梨、甲府は歴史文化的な観点からすると「東の山梨、西の広島」と並び称するほどのレベルにある地域だと思います。「甲府に元気がない」と皆さん方は思っているようですが、もしそうであるならば、武田信玄、甲府城、その他の中世の文化も全部含めて東日本の中心地であるという本来の価値を見出して、市民・県民の皆さんが正しく認識することが大事です。また、子どもたちにも非常に素晴らしい郷土であることをよく伝えることも大切です。

皆さま方の役割として、自分のまちの素晴らしさを再認識することと、そのために自分たちで調べてみるのが大事です。歴史や文化遺産を少しでも調べてみれば、この甲府・山梨が日本に冠たる文化レベルのまちであるということは、すぐにわかるはずで、自分たちで調べてみて、またそれを子どもたちにもしっかりと教え、子どもたちが自分の郷土を自慢できるようになってほしい。そういうことを皆さま方に期待したいと思います。甲府が栄える、山梨が栄えるということは、日本の半分の東日本の文化を後世に伝えるということになりますので、皆さまの役割は重要です。期待しておりますので、どうか頑張ってください。

萩原氏

私がずっとご指導いただいた先生がドイツに留学したときに、ドイツ人から「お前のまちはどういう歴史を持っているのか」ということをよく聞かれたそうです。そのドイツ人は、自分のまちの歴史について誇りをもって語っていたとのことでした。

私たち山梨県民あるいは甲府市民が、「私のまちはこうだ」と、自信と誇りを持って語れるだろうか。今日のシンポジウムを通じ、自分のまちを語れる、誇れる市民、県民になりたいと思いました。

ご清聴どうもありがとうございました。